

大震災から見えてくるもの ここでちょっと立ち止まって深呼吸を!



画家・NPO法人 ふれあいサポート館アトリエ主宰 倉本 信之

津波にさらわれた漁港。施設の屋根には船が打ち上げられている。PHOTO：天形 健

未曾有の自然災害、未経験の放射能恐怖

3月11日、午後2時46分、未曾有の大地震と大津波が東日本列島の太平洋側を襲った。この地震と津波によって、じつに多くの人々の生命が奪われ、財産が失われ、地域の絆が分断され、自然環境が破壊され、社会資本が逸失した。目に見えるものと見えない関係性が根こそぎに喪失してしまったのである。

だが、ここまでは自然災害の恐るべきことになじろぎ人間の無力を改めて知る言わば「天災」として、事態を甘受することも、ある程度までは可能であったかもしれない。しかし、この災害により引き起こされた東京電力福島第一原子力発電所の放射性物質漏出事故により、私たちはまったく未経験の恐怖と混乱に突き落とされている。

周辺住民は十分な情報を得られないまま避難を強いられ、現在に及んでいる。他方、元凶である放射性物質の漏出は、震災後、ほぼ3週間を経過した現時点でも止まっておらず、

あまつさえ汚染水を海に放出するという深刻な事態に至っている。災害は収束していない。進行中なのである。

多くの人たちがすでに発言しているように、これは単なる事故ではなく、今後、数十年、あるいはそれ以上の単位で私たちの生活に影響を及ぼす問題だろう。言い換えれば私たちの生き方や文明が問い直されている。

突き上げるような揺れがきた。

地鳴りがした、続いて突き上げるような揺れがきた。

そのとき、私はいつものようにアトリエで子どもたちに絵を教えていた。私の自宅とアトリエは、福島県の太平洋側北部の相馬市にある。

机が床を滑ってずり動いた。だが、子どもたちは日ごろの避難訓練の効果か、机の下に潜り込んで机の脚にしがみついていた。かなりの時間その状態が続いたが、揺れがようやく収まってきたので、子どもたちを屋外に避